

広島県医師会被爆伝承コーナーオープニングセレモニー

ーヒロシマの医療従事者が残した医療資料を後世に伝承するー

と き 令和4年8月4日(木) 午後1時30分

ところ 広島県医師会館 広島県医師会被爆伝承コーナー



広島県医師会	会 長	松村	誠
広島県医師会	副 会 長	岩崎	泰政
広島県医師会	常任理事	茗荷	浩志
広島県医師会	常任理事	檜山	桂子
広島県医師会	常任理事	平尾	健



広島県医師会被爆伝承コーナー
オープニングセレモニーでのテープカット

令和4年8月4日(木)、広島県医師会館1階ホワイエにおいて、広島県医師会被爆伝承コーナーのオープニングセレモニーが開催された。岩崎泰政副会長の司会で、松村誠会長の開会挨拶の後、来賓の田邊昌彦広島県副知事、松井一實広島市長、越智光夫広島大学長、滝川卓男広島平和記念資料館長、佐藤修治広島市医師会副会長よりご祝辞をいただき、実際に資料を提供いただいた先生方にもご臨席いただいた。

本コーナーでは、先生方より提供いただいた被爆者の死亡診断書、カルテ、被爆瓦など11点の資料と合わせて、広島平和記念資料館より提供いただいたポスターなどが展示される。

当日は、報道7社(新聞社3社、通信社2社、テレビ関係2社)が出席し、新聞やWebニュースなどで広く取り上げられた。

以下、概要を報告する。

開会挨拶 (要旨)



広島県医師会会長 松村 誠

皆さま、こんにちは。本日は大変な猛暑であり、コロナ禍でもあります。そして、何よりも広島にとって最も大切な日、8月6日の2日前の大変お忙しい中、ご

出席を賜りまして厚くお礼を申し上げる次第です。特に広島県副知事の田邊昌彦様、広島市長の松井一實様、広島大学長の越智光夫様、広島平和記念資料館長の滝川卓男様、広島市医師会副会長の佐藤修治様、大変ありがとうございます。

77年前、この地に人類史上初めて原爆が投下され、一瞬のうちに広島は壊滅しました。その下で、医師・看護師約2,370名のうち、約9割が被爆されたといわれております。

その中で辛うじて生き残られた医師・看護師たちは、自らが負傷しているにも関わらず、被爆者の救護や治療にあたりました。その模様は本日、展示しております福井芳郎画伯の「救護に命を捧げた被爆医師と看護婦」に描写されております。是非ご覧いただければと思います。そういった医師たちがいかに原爆に向き合ったか、そして医療者としての使命と責任を全うしたか、それを伝えたいと思いこの展示コーナーを開いたしました。

中でも、当時の広島県医師会長であった大原博夫元会長は広島市内におられず入市被爆されましたが、広島市医師会長であった吉田寛一元

会長は直接被爆されました。このお2人とも自らが被爆で負傷しているにも関わらず、救護や治療に全力を尽くされました。まさに私たちヒロシマの医師の原点であると考えます。

今、被爆後77年がたとうとしております。会員の手元に被爆の実相を伝える資料がいまだに残されているのではないかと、最後のチャンスではないかと思い、このたび、1年前のちょうど本日、広島県医師会6,900名の全ての会員に資料の提供をお願いしたところ、多数の寄贈をいただき、本日の「広島県医師会被爆伝承コーナー」の開設に至りました。大変ありがとうございます。具体的な内容につきましては後ほど、ご説明させていただきます。

特に広島平和記念資料館からのご提供、そして、広島市医師会と尾道市医師会からもご提供いただきましたことにあらためてお礼申し上げます。今、世界は、まさにロシアによるウクライナ侵攻で核兵器が使用されるのではないかと戦後最大の危機に直面していると思います。いつも松井市長が言われています「核兵器は絶対悪である」ということ、その絶対悪に対する処方箋は核兵器廃絶しかないとも私たちが思っております。私たちヒロシマの医師は原爆で殉職された先輩たちの尊い意志を引き継いで核兵器廃絶と平和を実現すべくささやかではありますが、「広島県医師会被爆伝承コーナー」を通じまして次世代に伝えとともに私たちの使命も全うしたいと考えております。

本日は、大変ありがとうございます。



広島平和記念資料館提供のポスター



ショーケースに保管された被爆資料

来賓挨拶

広島県副知事
田邊 昌彦

あらためまして皆さん、
こんにちは。ただいまご紹介
いただいた広島県副知事
の田邊でございます。「広
島県医師会被爆伝承コー
ナー」の開設、誠におめで

とうございます。心からお祝い申し上げます。
また開設に当たりまして、本当に多大なご尽力
を賜りました松村会長をはじめ、広島県医師会
の皆さん、そして関係者の皆さん、何よりも貴
重な資料、あるいは貴重な自分自身の体験を
語っていただいた県内の医師の皆さん、あるい
はその関係者の皆さんにも心からお礼を申し上
げたいと思います。

松村会長もおっしゃっておられましたが77年
前、原子爆弾の被爆によって、想像を絶する負
傷者が発生したわけであります。薬もなく、満
足な治療器具もなく、情報もなく、そしてご自
身も被爆される中で、まさに懸命な治療を続け
られました。今日ここに展示されている資料は、
もちろん被爆者、あるいは被爆治療の実相を後
世に残す資料でありますけれども、同時に大変
な中で、しっかりと命と向き合ってこられた医
療関係者の方々がおられる、このことを後世に
語り継いでいけるものであると考えます。そし
て、そのときの精神は今も引き継がれていると
思っております。

今年も松村会長、広島県医師会は、在外被爆
者の援護のために南米・北米に健康相談等事業、
そしてIPPNW日本支部の事務局を担っていた
だいております。医師による核戦争反対、ま
さにあの精神が、今も脈々と受け継がれている
ことを実感する次第でございます。

広島県も引き続き、高齢化が進む被爆者の援
護、そして、「核兵器のない平和な国際社会の
実現」に向けて努力をしまいたいと思います
ので、引き続き、御支援・御協力を賜ります
よう、心からお願い申し上げます。

広島県医師会のますますのご発展、そしてご
参会の皆さまの御健勝・御活躍を心からお祈り
申し上げまして、ごあいさつとさせていただきます。
本日は誠に誠にありがとうございます。

広島市長
松井 一實

「広島県医師会被爆伝
承コーナー」オープニン
グセレモニーの開催に当
たり、一言御挨拶を申し
上げます。

広島県医師会の皆様にお
かれましては、日頃から広島の医療の研鑽、躍
進、普及を目指して御尽力いただいております。新
型コロナウイルス感染症に対しても、正確な情
報発信やワクチン接種への継続した呼び掛けな
ど、県内での感染拡大防止に努めておられるこ
とに、心から感謝を申し上げます。

77年前、広島に投下された一発の原子爆弾は、
罪のない多くの人々に惨たらしい死をもたらし、
辛うじて生き延びた人々にも心身に深い傷を残
しました。被爆者の高齢化が進み、自らの被爆
体験を語ることでできる方が少なくなっている
中、被爆の実相を後世に伝えていくことは我々
の抱える大きな課題です。

そうした中、広島県医師会の皆様、被爆当
時のカルテなどの資料を収集され、従事者が自
らも被爆しながらいかに治療に当たり、惨状に
向き合ったのかを伝える「広島県医師会被爆伝
承コーナー」をオープンされたことは、被爆の
実相を後世に伝える上で誠に意義深く、その取
組に対し深く敬意を表しますとともに、市民が
主体となった取組の好事例として大変心強く感
じております。

本市も、平成24年度から被爆者の体験や平和
への思いを受け継ぎ、被爆者に代わりそれらを
伝える被爆体験伝承者の養成を実施しており、
本年度からは、家族を対象とした家族伝承者の
養成を新たに始めました。また、今年3月には、
平和記念公園内に、この地に暮らしていた人々
の日常が、原爆により一瞬にして奪われた悲惨
さと原爆の非人道性を伝える被爆遺構展示館を
新たに設置したところです。

皆様におかれましては、今後とも被爆の実相
を守り、多くの方に広め、次の世代に伝えてい
く取組に、引き続き一緒になって取り組んでい
ただけることを心から期待しています。

終わりに、本日お集まりの皆様の今後ますま
すの御健勝と御多幸を心から祈念いたしまして、
私からの御挨拶とさせていただきます。

**広島大学長
越智 光夫**

「広島県医師会被爆伝承コーナー」オープニングセレモニーにあたり、広島大学を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

原爆投下から77年を経過した今年、全国の被爆者は11万8,935人となり、初めて12万人を割り込みました。被爆者の方々の平均年齢も84.53歳と高齢化が進む中、被爆体験の継承が喫緊の課題となっていることは、皆さまご承知のとおりです。

先ほど松村会長からもご紹介がありましたように、昭和20年8月6日、広島市内では医師298人のうち270人が被爆しました。軍医も含め225人が直爆や放射線障害により亡くなったという記録もあります。かろうじて生き延びた医師や看護師たちは、自ら傷つきながら焼け残った病院や診療所、救護所で懸命に被爆者の治療に当たったと聞いております。

このような尊い活動の証ともいえるカルテや診断書、手記など貴重な資料が広島県医師会の手で収集・公開されますことは、誠に時宜を得たものであると思います。広島の医療人の一人として、松村誠会長をはじめ資料を提供された広島県医師会の先生方に深く敬意を表します。

広島大学医学部の前身である広島県立医学専門学校は原爆投下の前日の昭和20年8月5日、広島市皆実町で開校式を行いました。

翌日、原爆によって校舎と水主町にあった附属医院は全焼しましたが、教職員と学生の多くは開校式の後、高田郡小田村(現安芸高田市)の高林坊に疎開していたため、奇跡的に惨禍を免れることができました。その後、市内に駆けつけて救護活動に当たった教員や学生も多かったと聞いています。

以来、広島大学は昭和36年に設置された原爆放射能医学研究所(現在の原爆放射線医科学研究所)を中心に、放射線の人体影響や被ばく医療に関する教育・研究・臨床に取り組んでまいりました。今年5月、原医研が保管している米国返還資料のうち、被爆初期の100名のスライド標本をデジタル画像化したデータベースを公開しました。

原爆が人類に及ぼした「負の遺産」を後世に伝える科学的資料として、研究や平和教育に活用していただければと願っております。

今後も、広島県医師会はもとより広島県、広島市、放射線被爆者医療国際協力推進協議会(HICARE)など関係団体と連携・協力しながら、被爆資料の収集・保存と活用を進めてまいりたいと考えています。

ロシアによるウクライナ侵攻によって核兵器使用のリスクが高まる今日、世界で初めて原爆が投下された地であるヒロシマだからこそ、伝えられること、できる取り組みがあります。広島県医師会による被爆医療の伝承は、まさにこのような取組の一つであると確信しております。

終わりに、新しくオープンした広島県医師会被爆伝承コーナーが、平和への誓いを新たにする場となることを祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

広島平和記念資料館長**滝川 卓男**

ただ今ご紹介いただきました広島平和記念資料館長の滝川でございます。

本日は「広島県医師会被爆伝承コーナー」オープニングセレモニーにお招きをいただき誠にありがとうございます。

ございます。

広島県医師会におかれましては、広島の医療の研さん・躍進・普及を図られ、市民の健康と生命を守る活動のみならず、ドクター・ジュノー顕彰事業や核戦争防止国際医師会議への参加など、被爆体験の伝承や核兵器廃絶に向けて大きく貢献して来られました。改めまして松村会長をはじめ、役員、会員の皆さまの御努力に深く敬意を表します。

一発の原子爆弾により何の罪のない多くの命が奪われ、広島街が破壊尽くされてから77年がたちます。被爆者の高齢化が進み、自らの被爆体験を語る被爆者が減少するとともに、貴重な被爆資料の風化が懸念されるなか、本日ここに「広島県医師会被爆伝承コーナー」がオープンし、被爆当時の医療現場の実態を、当事者の目線から次世代に伝承するという新たな取組が始まることは、大変有意義であり、関係者の方々のご尽力のたまものであると考えています。

当館でも、常設展示や現在開催中の企画展「原爆と医療」において、被爆者の治療と病状の解明に向き合った医師や看護師の活動を紹介しています。悲惨このうえない状況の下、目の

前の命を救うため、懸命に働く人々の姿には、誰もが胸を打たれます。

被爆体験を継承するうえで、当時の記録や体験者の証言といった資料は重要な要素です。今後とも、原爆と医療に関わる貴重な資料を幅広く収集し、末永く保存・活用していくために、より一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

最後に、広島県医師会のますますのご発展と本日ご臨席の皆さまのご健勝を心から祈念し、ご挨拶とさせていただきます。



広島市医師会副会長 佐藤 修治

皆さんこんにちは、広島市医師会副会長の佐藤でございます。本日の「広島県医師会被爆伝承コーナー」オープニングセレモニー開催、誠におめでとうございます。

本来ならば、私ども広島市医師会会長の山本がごあいさつすべきところではございますが、他の公務のため出席ができませんので、私がごあいさつ申し上げます。

「被爆体験の伝承」については、広島市医師会におきましても、被爆地の医師会として、医師の被爆体験や平和への思いを継承することを目的に、「ヒロシマ被爆二世^{にせい}医師会議」を設置いたしました。被爆体験をつづった「ヒロシマ医師のカルテ」の電子化や若い方を対象にした市民公開講座など伝承活動を行ってまいりました。自らの被爆体験を語ることでできる被爆医師がますます減少している今こそ、さまざまな形で「被爆の伝承」が重要でございます。

被爆地の医師会として、できることは限られていますが、これからも、広島県、広島市、広島大学、広島県医師会と共に継続してまいりたいと存じます。

本日は、誠におめでとうございます。



司会を務める岩崎泰政広島県医師会副会長・広報戦略室室長

広島県医師会被爆伝承コーナー 展示物品の紹介



原子雲の絵



溶融した瓦

広島県医師会被爆伝承コーナー 展示物品一覧

展示物品	提 供	概要説明
ポスター類	広島平和記念資料館	原爆投下前から被爆、被爆直後の混乱、熱線による被害、大混乱の中の救援活動、家族・知人の搜索の模様など
ヒロシマの医師の原点	広島県医師会	当時の広島県医師会大原博夫会長と広島市医師会吉田寛一会長の原爆投下後の活動記録
溶融した瓦	おだ内科クリニック 院長 小田 健司 先生	昭和20年頃、母が原爆投下後の広島市内にて回収した瓦
16菊花紋章鬼瓦	おだ内科クリニック 院長 小田 健司 先生	昭和20年頃、母が広島市中区中町の白神社付近に建てられていた広島控訴院付近にて回収した瓦
原子雲の絵	おだ内科クリニック 院長 小田 健司 先生	草津梅山（現：広島市西区草津梅が台）にあった自宅から母が目撃した原子雲の絵
瀧口医院 カルテ	滝口耳鼻咽喉科 瀧口 峻 先生	祖父の瀧口一三医師が広島県比婆郡峰田村（現：広島県庄原市春田町）で開業していた医院のカルテ。昭和20年8月6日以降は広島市内から逃れてきた被爆者の診療も行っていた。
死亡診断書	隅田耳鼻咽喉科医院 隅田 正二 先生	義父堀江隆介は昭和20年8月6日、中国海軍軍需監督官事務所（現：広島市中区大手町二丁目、元銀行協会集会所）にて被爆。広島赤十字病院（現：広島赤十字・原爆病院）に収容され翌日、岩国海軍病院へ運ばれ、薬効なく8月12日に死亡。
『私もその中にいた』	松尾胃腸科内科医院 院長 松尾 泰夫 先生	先代院長である松尾公三医師が、爆心から800mの距離にあった特設警備隊広島西部第二部隊九中隊舎前にて被爆した体験を綴った書籍。
書籍	広島県医師会	広島市医師会、広島大学原爆放射線医科学研究所、放射線影響研究所など、専門機関の発行した書籍

閉会挨拶



広島県医師会常任理事 茗荷 浩志

皆さま、本日は大変お忙しい中、「広島県医師会被爆伝承コーナー」のオープニングセレモニーにご参加いただきありがとうございます。冒頭に松村会長より設置に至る経緯について説明がありましたが、本日このように盛大に挙行できましたことは、ひとえに皆さまのお力添えのおかげと、深く感謝申し上げます。新聞等の報道によりオープニングセレモニーの前に一般の方が来場され、幸先の良い1日になったと思います。

「広島県医師会被爆伝承コーナー」とありますように伝承していくことが非常に大事であり、本コーナーがますます発展していくためには、皆さまのご指導とご鞭撻が必要でございます。今後ともよろしくお願いいたします。

本日は、誠にありがとうございました。

担当役員コメント

昭和20年8月6日に広島に原子爆弾が投下されて77年が経過し、その長い月日や世代交代のために、被爆の貴重な資料の散逸や風化が懸念されるようになった。そこで広島県医師会は、当時の医療従事者がどのように被爆の惨状に向き合い、また関わったかを次世代に伝承するため、昨年8月に本会会員約6,900名に、被爆関連資料の提供をお願いしたところ、死亡診断書や多数のカルテ、証言など、さまざまな形でご協力をいただいた。これらのご寄贈いただいた貴重な資料を、広島県民はもちろん、県外や国外から広島を訪れた方々にご覧いただき、被爆の実相を少しでも知っていただくために、広島県医師会館1階に常設展示する「広島県医師会被爆伝承コーナー」を新たに設けた。

貴重な被爆資料を提供いただいた会員の方々とともに、展示にあたり広島大学原爆放射線医科学研究所の田代所長と久保田先生には、展示方法や展示内容を細かくご指導いただき、本年の原爆の日に関わることができ感謝申し上げます。またオープニングセレモニーでは広島県、広島市、広島大学、広島平和記念資料館、広島市医師会の各関係者より祝辞をいただき、多くのマスコミにも取材いただき報道された。特にセレモニー後に寄贈された先生方が多くの取材を受けておられ、被爆資料へのマスコミの関心度の高さがうかがえた。今後もさらに展示内容の充実を考えているので、会員の皆さまにもご協力をいただきたい。

(岩崎 泰政)



資料の撮影・取材を行う報道陣